

〔解説〕 平定臺灣戦圖

高田時雄

臺灣の存在は古くから傳説として何とはなく中國に知られてはいたが、現實的な領土として考えられたことはほとんどなかった。中國大陸からさして遠くない距離にあるこの美麗島フォルモーサがなぜかくも長いあいだ等閑に附されていたのかは、實際ほとんど理解に苦しむほどである。フランスの修道院長グロジエ (Jean-Baptiste Gabriel Alexandre Grosier, 1743-1823) は、「福建の海岸からわずか 30 リュー (30 lieues ≒ 133km) の、いわば目と鼻の先にあるこの島を中國人が明代になってはじめて発見したということは驚くべきことだ」と言っているが、外國人の目から見ても極めて不思議なことだったらしい¹。たぶん原住民の生活レベルが低い段階に止まっていて、中國商品の市場としてわざわざ危険な航海を敢えてするほどの価値を見いださなかったことと、反対に中國が欲するような特産品も臺灣にはこれと違ってなかったことがその理由の一つであろう²。長いあいだ中國の領土に組み込まれず、いわば無主の島であったことが、臺灣の歴史を極めて複雑なものにした。小文の主題は 18 世紀の末期における乾隆の臺灣平定であるが、その顛末を敘述する前に、この島の歴史を簡単に見ておくべきであろう。

美麗島小史

モンゴル人の王朝である元を北方に驅逐して成立した漢人の明朝は、治安維持を最優先に海禁を行った。沿海住民の海外渡航を厳しく制限したのである。福建と臺灣の間にある澎湖諸島には、それまで中國東南沿岸の漢人が築き上げたコロニーが存在したが、太祖朱元璋はそれも強制的に放棄させ、住民を盡く内地に移

¹*Histoire générale de la Chine, ou Annales de cet empire*, traduites du textes chinois, par le feu Père Joseph-Anne-Marie de Moyriac de Mailla, Jésuite François, Missionnaire à Pe-king. Tome Treizieme et Dernier. Volume de supplément, rédigé par M. l'Abbé Grosier, Paris, 1785, p.164. “L'isle Tai-ouan, ou Formose”.

²清朝の領土になって以降、臺灣の開発が進むにしたがい、「土沃産阜、耕一餘三」(魏源『聖武記』)と稱された豊かな大地は福建の兵糧の供給源として重きを爲すに至ったが、これはずっと後のことである。

した。その後、永樂帝の時代に一時積極的な海外發展政策が取られたものの、やがて倭寇対策もあり原則として海外渡航は禁止された。しかしその一方で海賊たちは臺灣を根城として、密貿易や海上での略奪行為を事とした。彼らは和寇とも結び、東南海上に一大勢力を築き上げ、明朝政府もその扱いにはしばしば手を焼く始末であった。彼らの中からやがて臺灣に比較的恆久的な基地を建設し、海上のみならず臺灣沿海部に城砦を構えるものが現れた。顔思齊や鄭芝龍の一黨がそれで、福建沿海部から貧困な無業者を呼び寄せ、諸羅（現在の嘉義市）、笨港（現在の雲林縣北港鎮）一帯の開発に従事するとともに、軍の編制を整えると、やがて大陸に侵攻するほどの實力を備えるようになった。顔思齊が死んで、天啓6年（1626）鄭芝龍が統領となると、騎虎の勢いは最早止めようなく、明朝政府は招撫政策に轉じざるを得なかった。福建巡撫の官銜を得た鄭芝龍は、他の海賊勢力を驅逐し、オランダ人と通商條約を結んで貿易に従事するなど、東南海上に宛然一箇の獨立政權を樹立せんとする構えであった。

さてちょうどそれと前後してヨーロッパ人が虎視眈々と臺灣に狙いをつけていた。バタビア（今日のジャカルタ）に據點を置くオランダ東インド會社は、當初澎湖諸島を占據してここを中繼基地としようと思論んだが、明朝の強力な抵抗に遭い、撤退を餘儀なくされ、1624年、現在の臺南に当たる地を新たな據點とすることとなった。ここには周邊から流れ込む河川が運ぶ土砂の堆積によって出来た砂洲が、灣を取り圍むように點々と連なってあたかも列島のような觀を呈していたが、そのもっとも外側の一鯤鯓³に名高いゼーランダ城（Fort Zeelandia、熱蘭遮城）を建設した。さらに翌年には原住民から土地を譲り受け、灣の對岸にも倉庫や宿舍を設けると同時に堅固な城塞を築いた。これがいわゆるプロヴィンシア城（Fort Provintia、現在の赤崁樓）である。この砂洲と内海からなる一帯は、現地人によってタイワンと稱されていたが、それを漢字で寫したものが臺灣であり、今日の地名の起源である。

オランダ人の臺灣占據は、當初、日本や中國との貿易の中繼基地として利用することであったが、やがて臺灣の豊富な資源に着目し、それらを商品として海外に輸出した。とりわけ鹿皮は輸出品目のうち最大のものであった。當時臺灣には夥しい數の鹿が生息していたとされるが、亂獲が祟って今日ではほとんどその姿を見かけることはない。また原住民に對しては、宣教師を利用することで、各部落の長老を懐柔しつつ、巧妙にその統治機構に組み込んだ。一方で漢人に對してもその生産力を最大限に活用し、土地とともに家畜や農具を提供して耕作に従事させ、收穫に應じて課税した。もちろんこうした體制が大きな矛盾を孕んでいたことはいうまでもなく、しばしば衝突や叛亂が起こったことも事實であるが、オ

³鯤は鯨（くじら）の意味で、鯓はその盛り上がった背部をいう。したがって鯤鯓は、海上から見るとこれらの砂洲が鯨の背のように見えることから名付けられ、一鯤鯓から七鯤鯓まであった。

ランダの臺灣統治は總體としては比較的うまく機能していた。

オランダが臺灣南部に據點を築き、着々と殖民地の體制を整えつつあった頃、臺灣北部にはスペイン人が現れた。オランダに遅れること2年、スペイン人は1626年に現在の基隆の和平島にサン・サルバドール城（Castillo de San Salvador）を、1629年に北西岸の淡水にサント・ドミンゴ城（Castillo de Santo Domingo、紅毛城）を建設した。スペイン人はフィリッピンのマニラを根據地として、メキシコのアカプルコとのあいだを行き來する、マニラ・ガレオンとして知られる定期便を就航させていた。このガレオン船によってモルッカ諸島の香辛料、中國の絹織物、陶磁器などがメキシコ經由でヨーロッパに送られ、メキシコからは大量の銀がマニラへ、さらに中國へ運ばれた。鎖國以前の日本にもガレオン船はやって來ていた。このマニラ・ガレオンの安全航行を確保するための情報基地として期待されたたこの據點は、しかしその役割を果たすことが出来ないばかりか、殖民地經營上でも經濟的に自立しえず、マニラ政廳にとって大きな負擔となり、次第に兵力の削減を餘儀なくされ、1641年、その勢力はついにオランダ艦船によって驅逐されてしまった。

さて1644年、李自成の農民起義軍によって北京は陥落し、崇禎帝は自盡して明朝は終焉を迎えた。それとともに滿州に起こった新興の清朝が北京に入城し、政權を樹立した。同時に南京では宗室の福王が南京で即位し、弘光帝となった。世に言う南明である。しかし清朝の軍隊は怒濤の勢いで南下し、南京の福王政權はわずか一年しかもたなかった。1645年、鄭芝龍たちは福州に唐王を擁立して清朝に對抗したが、勢いの差は如何ともし難く、鄭芝龍は1646年、清朝に降った。鄭芝龍に一子あり、その名を鄭成功（1624-1662）という。鄭成功は父親がまだ日本の平戸に居た頃、日本人の母田川氏とのあいだに生まれた子で、七歳の時に福建に呼び戻され、十五歳で南安縣の稟生⁴となり、二十歳で南京の太學に入り、錢謙益に就いて學んだという英才であったと傳える。この頃、父鄭芝龍の幕下にあったが、清軍に投降することに強く反対し、父と袂を分かって南明王朝を支え續けた。ちなみに鄭成功は唐王（隆武帝）から朱姓を賜わったことで「國姓爺」と稱される。南明は1646年12月、桂王朱由榔が廣東の肇慶で即位して、翌年から年號を永曆と改めた。鄭成功はその正朔を奉じて、金門、廈門を根據地として各地に出撃、一時は漳州、泉州を攻略するなど、その勢威は大いに振るった。永曆12年（1658）、鄭成功は決戦を期して八十萬の軍勢に八千の軍船を動員し、大規模な北伐に乗り出す。軍勢は長江を遡って鎮江を降し、一時は南京を包圍するほどであったが、慢心からする氣の弛みもあって、作戦に圓滑を缺いたことで、清軍の反攻に遇い、將兵の半數を失うなどの慘敗を喫し、金門、廈門に撤退を餘儀なくされた。當然、清

⁴秀才中の優秀者で、官から糧食の供給を受ける。

軍は勢いに乗って、成功軍の消滅を目指して攻め寄せたが、防戦に努め、辛うじてこの彈丸の地を保持することが出来た。しかし先の見通しは暗く、行き詰まりは蔽い難い情勢であった。ところが一方で臺灣から傳わってくる情報では、目下オランダの支配下にある臺灣は沃野千里の豊穰な土地で、清朝に對抗すべく力を養う上では恰好の地であるという。さらにオランダ商館の通辭何廷斌が詳細な地圖を獻じたこともあり、鄭成功は軍議のすえ、主力を臺灣に移すことに決定。ついに永暦15年（1661）3月、鄭成功軍の兵士二萬五千を乗せた軍船四百餘が、何廷斌を水先案内人に臺灣に向けて進發した。澎湖諸島を経て臺灣に到着した艦隊は、案内の宜しきを得て、満潮時を見計い、鹿耳門を何事もなく通過、臺江灣内に入り、プロヴィンシア城を包圍し、これを攻略した。オランダ人はゼーランダ城に籠もって抵抗したが、衆寡敵せず、結局鄭成功の軍門に降った。同年の12月のことであった。かくしてオランダの臺灣統治は38年間を以て終わりを告げた。

臺灣に撤退した鄭成功は、臺灣を東都とするとともに、プロヴィンシア城を承天府、その北を天興縣、南を萬年縣とするなど行政区畫を定め、また屯田を行い軍糧の確保を圖ったが、これらは「反清復明」の大目標のための懸命な努力であった。一方、清朝側も「遷海令」によって臺灣の孤立を畫策するとともに、鄭氏の墳墓を破壊したり、北京にあった鄭芝龍を殺すなどの舉に出て、鄭成功を挑發した。しかし雲南で命脈を保っているとされる永暦帝の消息はなく、自身の家族の中に起こった醜聞などもあり、鄭成功の精神的打撃は大きく、ついに病に倒れ没するところとなった。臺灣に移ってわずか一年、享年三十九歳であった。

鄭成功の亡き後、成功の弟世襲と、廈門にあった長子鄭經のあいだで後繼争いが生じたが、結局鄭經が臺灣に入って政權を掌握した。しかし清軍と鄭氏に恨みを抱くオランダ勢力の連合軍の攻勢の前に、廈門、金門が陥落し、永暦18年（1664）ついに大陸の沿岸諸島を全面放棄し、臺灣に撤退することとなった。東都を東寧と改めるとともに、天興、萬年の二縣をそれぞれ州とし、更に南北路と澎湖に安撫司を設置して、行政組織を整備した。また政務を補佐する上で陳永華という優れた人材があったことも幸いして、鄭氏政權による臺灣經營はますます順調に進んだ。福建に難を避けていた明の宗室や遺臣たちも、鄭經とともに陸續臺灣に渡ってきたために、文化的發展にも大いに見るべきものがあつた。かくして臺灣島に始めて安定した漢人社會の成立を見ることになったのである。この鄭氏が臺灣を統治した時代は、一般に明鄭時代と呼ばれているが、臺灣に出現した最初の漢人政權が、「反清復明」を旗印に掲げる勢力であつたことは銘記すべきであろう。それはあたかもこの島が常に大陸に対する反對勢力の據點となる運命を背負っていたかの如くである。

鄭氏政權に對して清朝は何度も攻撃を仕掛けるとともに、使節を派遣して投降を促したが、兩者ともに條件面で折り合うことなく推移した。永曆35年(1681)に鄭經が病没すると、またしても相續で混亂が生じたが、正室の生んだ嫡流ということで次子の鄭克塽が王位に即いた。しかし克塽はなお幼年で、實權は義父の馮範成の手中にあった。このように政權内部に矛盾を抱えるとともに、不作や災害による經濟的行き詰まりは鄭氏政權の大きな問題であった。その一方で海峽の緊張はいよいよ高まりつつあった。鄭氏政權の混亂を好機と見た清側では、李光地上奏によって、施琅(1621-1696)に指揮を委ね、大規模な侵攻が開始される。施琅はもと鄭芝龍麾下の武將で、當初芝龍とともに清朝に降ったが、やがて鄭成功の軍に参加してしばしば軍功を挙げ、明鄭軍の重要な將領となった。しかしある事件をきっかけに鄭成功の怒りを買って、父兄が鄭成功に殺され、再び清朝側に即いたという、そういう經歷の人物である。臺灣の鄭氏に對しては一貫して強硬策を主張していた。永曆37年、すなわち清朝の年號では康熙22年(1683)6月14日、施琅の率いる大艦隊がついに臺灣に向けて進發した。清軍はまず澎湖島を攻撃、七日に及ぶ激戦の末これを陥落させ、守備軍の將劉國軒は東寧に退却した。澎湖を失った明鄭軍は狼狽し、軍議を開くものの甲論乙駁、和平を主張するものあれば、斷固決戦を唱えるものある始末で、一向に結論に達しなかった。そうこうするうち施琅が劉國軒の部下を派遣して投降を呼びかけてきた。劉國軒も投降に傾き、馮範成を説得したため、鄭克塽はついに降伏に同意するに至り、7月11日降伏文書を提出した。當初求めた鄭氏の臺灣における地位保全は認めるところとならず、8月13日施琅は臺灣に入った。永曆15年、鄭成功が臺灣に遷って以來、23年の明鄭時代は終わりを告げた。

乾隆の臺灣平定戰爭

さて乾隆の「平定臺灣戰圖」が描くのは、乾隆51年に起こった林爽文および莊大田の叛亂鎮壓の情景であるが、臺灣では俗に「三年一小亂、五年一大亂」といわれるように、清朝の支配下に入ってからでも大小の叛亂がしばしば起こっていた。規模の大きなものとして、康熙60年(1721)に勃發した「鴨母王」⁵朱一貴(1690-1722)の役がある。この時には臺灣府城(現在の臺南市)も陥落し、一時臺灣全土が反亂軍の手に落ちてしまうほどであった。朱一貴は「中興王」を稱して明朝の繼承を掲げ、年號も永和と改めた。しかし清朝は一萬二千の兵を投入し、半年たらずで亂を鎮壓、朱一貴等首謀者は北京に護送され處刑された。その後もやや規模の大き

⁵朱一貴は鴨の飼育を業としていたことから、民間では「鴨母王」という呼稱が用いられた。

な叛亂は何度か繰り返されている。臺灣では官吏の横暴もさることながら、官民間の矛盾に、漳州人であるか泉州人であるか、或いは廣東人であるかによる、敵對意識が複雑に絡み合い、いわゆる械闘に發展することが多く、こういった地域の特殊事情が大規模叛亂の背景にあったことを忘れてはならない。また下層人民を糾合する祕密結社の動きも極めて大きなモメントを占めている。「反清復明」はこういった祕密結社に通底する口號^{スローガン}であった。

「平定臺灣戰圖」は以下の12圖からなる

1. 「大剿諸賊開通諸羅並進攻斗六門」
2. 「大埔林之戰」
3. 「攻克斗六門」
4. 「攻克大里杙賊巢」
5. 「集集埔之戰」
6. 「攻勦小半天山賊匪」
7. 「生擒逆首林爽文」
8. 「大武壠之戰」
9. 「枋寮之戰」
10. 「生擒莊大田」
11. 「抵廈門登岸並巴圖魯侍衛等皆平安渡海凱旋」
12. 「賜凱旋將軍福康安參贊海蘭察等宴」

これら各戰圖が如何なる場面を描いているかを知ろうとすれば、林爽文および莊大田の叛亂について、時系列を追ってその顛末を見ていく必要がある。

林爽文は漳州府太平縣の人で、乾隆22年(1757)に出生、乾隆38年(1773)父に隨つて臺灣の彰化縣大里杙(現在の臺中縣大里市)に渡つてきた。乾隆49年(1784)に天地會が多くの會員を擁して一大勢力であるのを耳にし、入會を願ひ出て許された。さらに乾隆51年(1786)8月15日、大里杙の山内車輪埔において、普段から意氣投合している他の仲間たちと酒を酌み、天地會の誓約を交わした。そのころ前後して諸羅縣に屬する斗六門(現在の雲林縣斗六市)では、土地の有力者楊文麟の息子たち兄弟が財産争いから、それぞれ添弟會と雷公會という結社を組織して互いに對立した。凄慘な械闘に發展するのを恐れた楊文麟が結社のことを官に訴えたことから、當局の取り締まりが始まった。逮捕に出向いた官兵に對し、結社のほうでも必死に抵抗したため、雙方に多くの死傷者が出るなど甚だ紛糾する所となった。それも會員のほとんどが捕縛されて一旦終結したかに見えたが、ところが官憲の手を逃れた連中が、みな大里杙に逃げ込み、添弟會及び雷公會の殘黨が天地會に合流することになった。その年の10月、新しく赴任してきた彰化縣の知

縣俞峻は、大里杙で天地會が官に逆らい、年末にも騒亂を起こしそうだということを目にし、さっそく人をやって探索させた。その時に天地會の一味の家屋が官兵に焼かれたことから、一気に對決色が強まり、天地會では林爽文を擁して事を起こす手筈となった。11月17日、臺灣鎮の総兵柴大紀は巡察のため偶々彰化縣を訪れ、知縣の俞峻からこの叛亂の鎮壓を要請されるが、柴大紀は兵の調達と稱して臺灣府に歸ってしまう。その後、反亂軍の勢いは増す一方で、11月28日夜、彰化縣城はあっけなく陥落してしまった。叛亂には漳州籍の住民が次から次に加わり、その勢いはまさに燎原の火のごとくひろがった。林爽文等は建元して「順天」を稱し、配下を官職につけるなどの論功行賞を行った。彰化について諸羅、淡水が陥落し、南方では林爽文に呼應して擧兵した莊大田が鳳山縣城を占據した。林爽文の兵は一再ならず臺灣府城に迫ったが、柴大紀等の奮戦でかろうじて持ちこたえていた。

年が改まって乾隆52年のはじめ、福建水師提督黃仕簡の率いる兵が鹿耳門から府城に入り、また陸路提督任承恩の率いる兵が鹿仔港（現在の彰化縣鹿港鎮）に到着し、ようやく反攻の態勢が整った。黃仕簡は柴大紀を諸羅に、副將の郝壯猷を鳳山に、それぞれ縣城の奪還に向かわせる。柴大紀は連戦して敵を撃破し、なんとか諸羅縣城を取り返した。一方、郝壯猷は敵に阻まれ、50日かけてようやく鳳山に着いたところ、城は空であった。住民を呼び戻し、治安の回復を圖ろうとする矢先、住民に紛れて入り込んだ賊のために、3月10日、鳳山縣城は再び陥落し、郝壯猷は臺灣府城に逃げ歸った。また鹿仔港に入った任承恩は、諸處に兵を派遣して賊軍と交戦したが、大里杙にある賊軍の本營を衝くことは出來ずにいた。そもそも鹿仔港は泉州の出身者が多いところで、積年の械闘の経緯もあり、漳州人である林爽文の賊軍には同調せず、むしろこれを好機と見て賊の占據する彰化縣城に攻撃を仕掛け、賊を大いに破ったたほどであった。したがって官軍には協力的だったので、それをうまく利用すれば戦局は大いに異なった展開を見せたはずであるが、その連携は必ずしもうまく働いていなかった。

乾隆は當初この叛亂を、單なる械闘に過ぎず、大軍を動かすには及ばないと高を括っていた嫌いがある。當初、水師提督黃仕簡の臺灣派遣はやむを得ないとしても、陸路提督の任承恩まで投入する必要があるのかと言ったと傳えられている。しかし思わぬ事態の推移に、乾隆も眞劍に對應を考えざるを得なくなり、ついに2月21日、閩浙總督常青に命じて、黃仕簡と任承恩を内地に召還、革職のうえ刑部に引き渡して罪を問うとともに、常青自ら臺灣に向かわせた。さらにその後4月4日には、常青を正式に將軍に任じると同時に、江南提督藍元枚と福州將軍恆瑞を參贊として臺灣に派遣して一層征討軍の強化を圖った。しかし莊大田の兵は相變

ならずしばしば府城に迫り、防戦を餘儀なくされたため、府庫の銀兩も糧食も使い盡くし、武器も缺乏を來していた。官軍はこれらをすべて内地に仰がねばならず、補給の面でも危機に瀕していた。

その頃、賊軍は南北の中心である諸羅の攻略を戦略目的とし、是非ともここを取らんと林爽文みずから出馬して晝夜猛攻を仕掛ける一方、鹽水港（現在の臺南縣鹽水鎮）、鹿仔港を攻撃して府城から諸羅縣への糧道を斷とうとした。それに對し、柴大紀の率いる官軍四千は諸羅城に籠城し、懸命に數萬の賊軍の攻圍を防いでいた。寄せ來る敵に、城を出て戦うこと數知れず、消耗戦が展開され、その攻防5ヶ月に及んだ。その間、府城の常青は何度も援軍を送ったものの、すべて賊軍に遮られて、効果を發揮できなかった。

7月27日、乾隆は護軍統領海蘭察を參贊大臣に、舒亮、普爾普を領隊大臣に任命、舒亮に第一隊を、海蘭察に第二隊を、普爾普に第三隊をそれぞれ率いて臺灣に進發するよう命令した。さらに8月2日、協辦大學士陝甘總督福康安に命じ、欽差の關防⁶を帶びて臺灣に赴き、常青に替わって全軍の指揮をとらせることとした。福康安は乾隆の私生兒だという噂があるほどの寵臣で、乾隆38年（1773）の金川の役、さらに乾隆49年（1784）の甘肅回民の平定に大功を擧げており、乾隆にとってはまさに最後の切り札であった。これに先だつ6月20日、すでに乾隆は福康安を熱河の行宮に呼び寄せ、臺灣派遣のことを言い含めており、乾隆は比較的早い時期に福康安の投入を覺悟していたことが窺える。

福康安率いる清軍は、風向きの關係で進發が延び延びになっていたが、10月28日ついに錨を上げ、翌日鹿仔港に到着、潮の満ちるのを待って、11月1日の朝、上陸を果たした。麾下の精銳部隊もこの日陸續として到着した。11月3日乾隆は内閣に對して次のような上諭を下した⁷。「臺灣の逆賊林爽文の衆^{あつ}を糾^{あつ}亂を倡して以來、提督柴大紀は兵を統べ剿^すち捕え、諸羅を收復して後、賊匪は屢しば攻擾を経たれど、城内の義民は官兵を幫^{たす}同け、力を奮って守禦り、保護^{まも}って虞い^{まも}なからず。該處の民人は公を急^{たす}け義^{むか}に嚮い、志^{あつ}を衆めて城を成す。まさに嘉名^{よきな}を錫^{あた}えて、以てこの邑^{まち}を旌^{たた}うべし。諸羅縣を改めて嘉義縣と爲さしめ、すべて縣の良民をして倍^{ます}ます奮勵を加え、以て獎勵を明らかにせしめん。」現在の嘉義という地名はこの時にはじまる。

以上に紹介した林爽文叛亂の経緯はいわば前置きで、戦圖に描かれる清軍反攻の情景はここから始まる。大軍の精銳部隊を投入しただけあって、清軍は破竹の勢いで次々と賊軍を打ち破っていった。11月4日、海蘭察が先行して、林爽文が

⁶欽差關防とは皇帝によって全權を委任されたことを證明する官印のことで、それを押した文書は救命と同等の效力を有する。

⁷『欽定平定臺灣紀略』卷四十三（臺灣文獻史料叢刊第102種、臺灣大通書局、1987年）、679頁。

陣取る彰化東方の八卦山を攻撃し、ここを占領した。11月6日、福康安の本隊が鹿仔港を出發、目指すは既にその名を嘉義と變えた諸羅の圍みを解くことである。總勢一萬を超える兵丁に義民を加えた部隊が、路を探りつつ前進していくのを、賊軍は待ち伏せをして兩側の竹林や砂糖黍畑、さらには村の中からやみくもに鐵炮を撃ちかけてくる。福康安は落ち着いて部署を定めて應戦につとめ、義民も協力して竹や黍などを焼き拂った。林爽文軍はついに支えきれずに敗退し、清軍は前進を續けた。また海蘭察が嘉義から7里の牛稠山⁸まで進軍したとき、林爽文の賊軍一萬が四方から攻撃してものの、海蘭察は部隊を率いて陣中に突入し、山頂の砦を攻略、日暮時には嘉義の城内に入った。夜も更けて暗くなり、雨が降り雷の鳴る中を、連夜急行してきた福康安も兵を率いて入城した。かくしてついに嘉義の圍みが解かれると、城中の兵士や義民の喊聲は大地を震わすほどであったという。【第一圖】

福康安は城内の人々を慰撫した後、牛稠山に戻って陣を張った。同時に各地に部隊を派遣、既存の官軍と呼應しつつ賊軍の掃討を開始した。11月20日の黎明、福康安率いる大部隊は賊軍の據點の一つ斗六門を目指して進發した。10里ばかり行くと一萬餘の林爽文軍が大埔林（現在の嘉義縣大林鎮）、大埔尾（同じく現在の嘉義縣大林鎮）、中林（現在の嘉義縣中埔鄉）の三地點に布陣し、清軍を待ちかまえていた。福康安は恆瑞と普吉保を大埔林に、鄂輝と袁國璜を大埔尾に、そして海蘭察を中林に向けて進撃させた。海蘭察が先ず中林を陥れると、續いて大埔林も大埔尾も陥落した。清軍は追撃すること20餘里、敵兵の死體は野を埋め盡くした。【第二圖】

ついで菴古坑（現在の雲林縣古坑鄉）に進軍した。ここは天地會の首領の一人蔡福の根據地で、周圍に堀を設け、土壁に板を打ち付けた柵を設けてあったが、一氣呵成にここを攻め落とした。斗六門はここから30餘里の距離である。敵は清軍の騎馬を何よりも恐れていたため、諸處に落とし穴を設け、中に竹を鋭く削ったものを仕込んであったが、たまたま稲の刈り取りも終わった季節で、田に水もなかったのを幸い、稻田を通過して進軍した。11月21日、斗六門に達した清軍は四面から攻撃を仕掛け、長刀で竹の圍いを切りはらい、關門を破って突入、ついに斗六門を降したのであった。【第三圖】

残るは林爽文の本據地、大里杙である。清軍は敗走する賊軍を追って、11月24日の夕刻、大里杙の南5里の平台莊まで軍を進め、攻撃を開始した。大里杙は東は山に依り、南は川という要害の地、そこに土壘で砦を築き、堀を繞らしたうえ、内側には更に二重の竹柵を設け、大砲の備えまでであるという堅固な要塞である。清軍が川を渡って進もうとすると、賊軍は砦から鐵炮を撃ちかけてくる。清軍が川

⁸康熙56年の『諸羅縣志』（卷之一：封域志、山川）に「近諸邑治之背者、爲牛朝山」と見えるものがこれであろう。縣城のすぐ東に位置する。

を渡り終えると、今度は砦から押し出し、萬ほどの軍勢が三方から襲いかかる。いくら倒されても後から後から兵を繰り出し、その勢いは甚だ盛んで、日が暮れても戦線は一進一退、一向に落城の氣配はない。夜になっても賊軍はあちこちで夜襲を仕掛け、攻勢は續いた。11月25日、福康安はこの日の朝早く、軍勢を分けて進攻させ、ついに城内突入に成功した。賊軍の頭目の多くが戦死し、他は捕獲された。大砲や銃刀などの大量の武器が押収され、稻穀や牛などの夥しい軍糧が鹵獲された。【第四圖】

林爽文自身はすでに11月24日夜、家族とともに東の山道を抜けて大里杙を遁れ、まさかの備えとして砦を築いてあった集集埔（現在の南投縣集集鎮）に陣取った。そこで福康安は、12月4日さらに集集埔の攻略に向かった。集集埔は南北から山が迫り、その間を濁水溪が流れているという獨得の地形で、賊軍は溪流に沿って數里にわたり、崖上に石壘を築いて守りとしていた。清軍が山路と溪流の両方から攻めかけると、敵の軍勢も軍鼓を鳴り響かせ石壘の内側から鐵砲を連射し、大變な勢いである。清軍も火力で制壓すべく、大砲を放って應戦するが、なかなか決着がつかない。清軍は海蘭察が部下を率いて馬で渡河すると、福康安と恆瑞はそれに續けて兵を進ませた。兵たちは泳いで渡河すると、山を攀じ登り、石壘を突き倒して要塞内に突入した。追撃すること10餘里、近邊の草屋千餘を焼きはらった。逃げまどう敵兵の崖から轉落し、川で溺死するものも少なからず、この戦役では敵を斃すこと2千餘、賊徒100餘名が捕縛された。集集埔の戦いは實に今回の臺灣平定作戦における最大の山場であり、この一戦の勝利によって戦争の歸趨はもはや明かとなった。【第五圖】

福康安は、林爽文をはじめ逃れた賊徒の追跡を行い、諸處で殘黨を捕獲したほか、林爽文の父母や妻、弟が拘束された。また捕縛された頭目の一人阮和の供述によれば、林爽文は埔裏社（現在の南投縣埔里鎮）に逃れた後、更に餘黨二千人とともに小半天（現在の南投縣鹿谷郷に位置する山）に集結しているという。小半天は嵯峨たる山地で、まさに天然の要害である。12月18日、福康安は軍勢を三手に分けてそれぞれ隘路を進み、草木を掻き分けて敵陣に近づいていった。林爽文軍は山頂に柵を設け、石積みをし、路傍の大樹を切り倒して道を塞いでいる。清軍は急な崖道をそれこそ蟻のように攀じ登っていくが、山上からは石が降り銃弾が飛び交うため、兵は次々と討ち死にしていくな。それでもついに普爾普率いる廣東の郷勇が山上に登り着いたのをきっかけに、砦の柵が打ち破られ、林爽文軍は敗退した。多くの幹部が捕縛されたものの、そこに林爽文の姿はなかった。【第六圖】

叛亂はすでに鎮壓されたも同然であった。しかし首謀者の林爽文を捕獲せずには、撤退するわけにはいかない。しかも臺灣はそのうちに熱暑の季節を迎えるで

あろう。大陸から来た兵の中には暑熱に慣れないものも多く、林爽文の捕縛は一刻も忽せにできなかった。蕃社の情報によれば、林爽文はなお六、七千人を引き連れ、埔裏から北路に向かって潜伏中であるという。要路を押さえる一方、各地に兵を出して追跡したところ、12月21日夜半、敗残の林爽文軍は東勢角（現在の台中縣東勢鎮）で生蕃に襲われ、四百人ほどが殺され、残餘はさらに北に向かって逃走中だということが分かった。12月27日、清軍が獅子頭社（現在の屏東縣獅子郷）まで追ってくると、谷間に延々と死骸が何里にもわたって轉がり、川の中にはさらに多数の死體があった。聞けば、晝夜兼行で歩き續けた敗残兵がここまで来て行き倒れ、川を渡れずに溺死したものらしい。そのうえ生蕃に殺されたものも二千餘名という。

林爽文はわずか二百の殘黨とともに貓裡社（現在の苗栗）から北へ向かった。乾隆53年（1788）1月1日、清軍は林爽文に扮した頼達という男一名を拏捕、その供述によると、林爽文はこれ以上生蕃の地を抜けて北に逃れるのは無理と考え、打鐵寮（現在の桃園縣大溪鎮附近）一帯の林に潜んでいるという。ここは山地を抜ければ海岸に近い地帯のため、海に逃れられては困るというので、清軍は至る所に警戒線を張り巡らす一方、兵に村民の扮装をさせ、淡水の義民などとともに林爽文の捕縛に努めたところ、ついに1月5日、老衢崎（現在の苗栗縣竹南鎮）で林爽文とその一味を捕らえた。【第七圖】

林爽文は木の籠に押し込められて北京に護送、律に照らして凌遲の刑に處せられた。ただこれは替え玉であって、林爽文は配下の者たちの手によって竊かに廣東に運ばれ、なお生きているというまことしやかな噂が流れたことも事實であるらしい⁹。

林爽文が捕縛された後、福康安は斗六門や大里杙など重要な六據點に然るべき人材を配置し、合計4千8百の兵力を北部に殘留させ、殘された南部の掃討に着手した。南部ではなお莊大田の軍勢が鳳山縣や水底寮（現在の屏東縣枋寮郷）、大目降（現在の臺南縣新化鎮）などの地域に根強い勢力を張っていたからである。この頃、莊大田の軍は嘉義の東南に當たる大武壠（現在の臺南縣玉井郷一帯）の山地を根據地にしていて、時々平原の村里に出沒しては銃を放つなど不穩な行動をとっていた。この大武壠一帯には40幾つもの村があり、その多くが莊大田一黨の據點であった。福康安は戦略上先ず大武壠を攻略し、鳳山との連絡を斷つことが重要と考えた。そこで府城から水底寮に向けて兵を出し莊大田を牽制するとともに、大武壠の平原側四地點に兵を配置し、さらに東面の山地に住む生蕃に對しても、事情通の人物

⁹ 「1789年3月21日附け廣州發信のイエズス會宣教師グラモンの書信抜粹」(Extrait d'une lettre de M. de Grammont, Missionnaire, écrite de Canton, le 21 Mars 1789), *Mémoires concernant les Chinois*, tome 15, Paris, 1791, p.394.

を遣って作戦に協力するよう説得、大武壠内部の粵人部落や蕃社にも内應するように命じ、1月14日いよいよ各路に分かれて大武壠への總攻撃を開始した。1月16日、清軍が牛莊（現在の臺南縣善化鎮）に進んだところで、莊大田の部隊に遭遇した。賊軍は川を挟んで、その急流を頼みに抗戦を目論んだが、衆寡敵せず、五百餘名を失った。1月19日、清軍は餘勢を驅って南潭（現在の臺南縣歸仁郷）、大目降一帯にまで進出し、賊軍はまた六百餘名が討ち死にした。その他の戦線でも、清軍は續々と勝利を収め、大武壠の攻略は成った。福康安はこの戦役で捕獲した敵兵四百九十餘名を軍前において處断すると、時を移さず南下した。【第八圖】

情報に依れば、莊大田一黨は現在枋寮（現在の屏東縣枋寮郷）に集結しているという。福康安は海蘭察等を追討に向かわせた。1月26日、海蘭察は配下を率いて、敵の意表を衝いて甘蔗畑から出撃すると、頭目十餘名を討ち取り、兵士三百餘を斃した。さらに海岸まで敵を追い込むと、敵は逃れようにも船なく、再度必死に抗戦してくる。清軍はこれらを撃破、一千名を打ち倒したほか、海で溺れ死ぬものも數知れなかった。【第九圖】

莊大田は敗殘の兵を連れて臺灣最南端の瑯嶠（現在の屏東縣恆春鎮）に落ち延びた。ここに至るには曲折した山道しかなく、樹木が密生し、山内の18社はすべて生蕃という土地である。福康安は要所を封鎖し、海からの逃亡を防ぐ一方、各社の生蕃にも諸處の關門を固めさせると、烏什哈^{ウシハ}に命じ水軍と廣東の兵を引き連れ海路から進攻させ、海蘭察等には陸路を進ませた。2月4日、清軍は楓港（屏東縣枋山郷楓港村）に至り、翌5日早朝楓港を發し20里ばかり進むと、莊大田の軍が清軍の先鋒めがけて突撃してきた。しかし兵數に懸隔があり、莊大田は兵三百を失って柴城（恆春縣車城郷）に退却した。福康安は莊大田の生け捕りをめざし、隊を幾つにも分け、山上から海岸までをしらみつぶしに探索させた。烏什哈の水軍も風に恵まれ、すでに帆柱を連ねて到着し、沿岸一帯に停泊していた。水陸ともに最早逃げ場はあり得なかった。最後の一戦が行われ、莊大田は山中に逃げ込んだものの、義民の手によって捕獲され、府城に移送された後、處刑された。【第十圖】

かくして林爽文と莊大田を首魁とする臺灣の叛亂は最終的に鎮定され、内地から徵發した平定軍は陸續歸還していった。福康安自身は5月9日、鹿耳門から渡船し、同14日に廈門に到着した。【第十一圖】ついで孟秋7月丁丑日、乾隆は臺灣平定の凱旋將軍福康安、參贊海蘭察等に對し、熱河避暑山莊の「卷阿勝境」¹⁰において宴を賜わるとともに、功績顯著な臣下50名の肖像を描き、これを紫光閣に掲げさせた¹¹。うち20圖には乾隆自ら贊を作っている。【第十二圖】

¹⁰避暑山莊の東宮の一部をなす宮殿。

¹¹これら50圖のうち現存するものは「成都將軍法什尚阿巴圖魯雲騎尉鄂輝」の一點のみで、これは現在ニューヨーク在住の黃惠英（Dora Wong）女史の所藏であるという。聶崇正「紐約觀紫光

さてこれは後日談である。諸羅に籠城し奮戦した柴大紀はもと浙江江山の人で、林爽文の亂が勃發したときに府城の總兵であったことはすでに觸れた。乾隆は柴大紀の天晴れな戦いぶりと忠誠に感激して、世襲の一等義勇伯を賜うとともに、浙江巡撫に命じてその家に一萬金を與えたほどであった。ところが福康安が嘉義に入城すると、出迎えた柴大紀は乾隆の厚遇を盾に福康安に對しても些か禮を缺く所があった。その後、福康安が調べてみると、柴大紀の人物は信用がならず、結果、これまでその奏報に偽りがあったとして弾劾した。乾隆はすぐには福康安の訴えを取り上げなかったが、侍郎の徳成が浙江から歸任したので、柴大紀の件につき正したところ、密かに兵を内地に送って貿易に従事させたりした事實があるうえ、そもそも亂の勃發時に狼狽して適當な處置を講じ得なかったのが、このような大亂に發展した原因ではないかという意見であった。また當時提督であった任承恩を喚問したところ、やはり同意見である。そこで閩浙總督の李侍堯と福康安に調査の上、奏上を命じたところ、福康安の見解は、柴大紀は當初鹽埕橋の戦では少しく功あり、諸羅の守りでも些かの貢獻がなくはないものの、大官として平素の行跡に問題があり、また亂の起こった時にこれを防ぎ得なかったのは、すべて紀律の明かでないことが原因で、すべからく都に召還して法の裁きを待つべきだというのであった。李侍堯の云うところも福康安とほぼ同様であった。亂の平定後、乾隆 53 年 (1788) 7 月、柴大紀が都に召還され、軍機大臣による取り調べが行われると、柴大紀は再三にわたり冤罪を主張した。乾隆自ら尋問するに及んで、ようやく責任の所在を認めたものの、それでも無實を訴えつづけた。乾隆は最後の決斷を次のように下した。「福康安等は柴大紀を處斷せよというが、朕はその守城に少しく功勞あるを思い、量刑を軽くし、しばらく死刑の執行を猶豫するつもりであった。しかしながらあれこれと言ひ逃れをするに及んでは、これ以上の減刑はならぬ。法による裁きに従うべきである。黃仕簡、任承恩の罪も同じである。されど一は海澄公黃梧の末裔であり、一は任舉の子なれば、死刑のみは許すこととする。」¹²

いずれにせよこの一年三ヶ月に及ぶこの臺灣平定戦争は、清朝にとってかなり負擔の大きいものであった。フランス人イエズス會士の書翰には次のように見える。「美麗島の問題はようやく一段落したが、中國がかくもみっともない、かくも軍費を要する戦争を行ったことはかつてなかったことである。疾病や敵の鐵刃によって、少なくとも一萬以上の兵士を失い、二萬兩以上の戦費を費やした」¹³。この見方は、恐らく一個の外國人の觀察にとどまらず、中國國內にも同じ考えがあっ

閣功臣像記』『收藏家』2002 年第 2 期、26 頁。

¹²魏源『聖武記』卷八「乾隆三定臺灣記」。

¹³上掲グラモンの書信、同書、同一頁。

たに相違ない。

銅版畫

平定臺灣戰圖はすでに上に示したように全 12 圖からなる。各圖の上部には乾隆の御製詩が嵌め込まれているが、これは木版による印刷で、銅版圖に重ねて刷ったものらしい。檔案資料によると、銅版の原畫としてはもと福康安が進呈した 16 枚の戰圖があったが、人物などの描き方が方式に適っていなかったため、如意館（宮廷の畫院）に交付してこれまでの戰圖同様のサイズで新たに起稿させたところ、乾隆 53 年（1788）9 月 20 日に姚文瀚が「渡海凱旋圖」の畫稿を上覧に供した。乾隆はそれを承けて、姚文瀚のほか宮廷畫家の楊大章、莊豫德、賈全、謝遂、莊豫德、黎明たちに分擔して描くよう命じ、更に 10 月 5 日、起稿中の臺灣戰圖が出来上がれば、それを 12 幅 1 冊とし、1、2 圖出来るごとに次々如意館に渡して西域戰圖同様の方法で下圖を作成し、それが出来上がれば造辦處に回して銅版に彫るよう命令した¹⁴。

注目すべきは福康安自身が戰圖をもたらししたことである。彼の念頭には西域戰圖や、自らも参加した金川の戰圖のことが思い描かれていたに違いない。したがってそれらの數に合わせて 16 枚の原圖を用意したのである。しかし實際には乾隆の指示によって 12 枚に減らされ、16 枚がこれら戰圖の定數となることはなかった。いずれにせよ臺灣戰圖は 7 名の中國人宮廷畫家の手によって原圖が作成されたわけで、西域、金川のように西洋人畫家はこれに参加しなかった。その作成開始は正式には乾隆 53 年 10 月 5 日であり、遅くとも乾隆 58 年 11 月までには銅版畫全部の完成を見た¹⁵。繪畫そのものは、人物や樹木、巖石や波浪など盡く中國畫の技法を取り入れたもので、これを銅版畫に彫るとすこぶる不思議な印象を與える。原圖から銅版の刷印まで、すべて中國人の手になる作品で、その意味では中國版畫史上に異彩を放つものであることは云うまでもないが、銅版畫そのものとしては西域戰圖に比べて相當見劣りすることはやむを得ない。

これら銅版畫のうち、1「大剿諸賊開通諸羅並進攻斗六門」と 3「攻克斗六門」に

¹⁴翁連溪「清代内府銅版畫刊刻述略」『故宮博物院院刊』2001 年第 4 期（総第 96 期）、44 頁。Walter Fuchs, Die Entwürfe der Schlachtenkupfer der Kienlung- und Taokuang-Zeit, *Monumenta Serica*, 9, 1944, S.121 には、臺灣戰圖の作者として賈全と黎明の二名しか挙げていないが、今日では上記 7 名の作者名を挙げねばならない。

¹⁵上掲翁連溪論文によると、乾隆 58 年 11 月の檔案に、その時點までに作成された戰圖の銅版數及び印刷數、下賜など處分濟の部數を記したものがあり、それによれば臺灣戰圖 12 幅は 200 部印刷され、この時點までに各處の陳設用に 119 部、賞賜用に 81 部が拂い出されたことになっている。翁連溪「述略」44 頁を参照。

用いられた原銅版がベルリンの民族學博物館に所藏されている¹⁶。同館のアーカイブ資料によれば、これらはもと A. Goedel という人物の所藏であり、Goedel はそれをケルンのオークションハウス M. Heberle / H. Lemperts' Söhne に賣りに出し、それを当時の東アジア部門主任ミューラー (F.W.K Müller) が購入し博物館に納めたものだという¹⁷。

さて乾隆の題詩の時期を見ると、以下のように必ずしも圖の順序に従っていないことが分かる。

1	丁未嘉平 (乾隆 52 年 12 月)	7	戊申仲春 (乾隆 53 年 2 月)
2	己酉新正 (乾隆 54 年 正月)	8	己酉孟春 (乾隆 54 年 3 月)
3	丁未嘉平 (乾隆 52 年 12 月)	9	戊申新正 (乾隆 53 年 1 月)
4	丁未嘉平 (乾隆 52 年 12 月)	10	戊申仲春 (乾隆 53 年 2 月)
5	己酉新正 (乾隆 54 年 正月)	11	戊申季夏 (乾隆 53 年 6 月)
6	戊申新正 (乾隆 53 年 正月)	12	戊申孟秋 (乾隆 53 年 7 月)

もっとも時間の早いものが乾隆 52 年 12 月 (1, 3, 4) であり、以下 53 年 正月 (6)、1 月 (9)、2 月 (10) と続き、これらはそれぞれ戦況の報告を受けたときの即吟と認められる。また乾隆 53 年の 6、7 月もまた凱旋及び賜宴と同時に作られたものに相違ない。残る乾隆 54 年の 正月 (2「大埔林之戦」、5「集集埔之戦」) 及び 3 月 (8「生擒逆首林爽文」) の賦詩は、銅版畫の畫題に對應させるために新たに賦されたものと考えねばならない。先に見たように平定臺灣戦圖の作成は乾隆 53 年の 10 月に始まっており、現場からの要請も有ったものと想像される。しかし最終的に 12 幅から成る戦圖の全體がいつ完成したかの確實な時日は不明である¹⁸。

上に見たとおり、姚文瀚が「渡海凱旋圖」の畫稿を上覧に供したことが、臺灣戦圖製作のそもそもの始まりなのであるが、近年になって康熙の「欽定平定臺灣凱旋圖」というものが中國のオークションに出現した¹⁹。大きさ 78.5x133cm の見事な彩色圖である。驚くべきはその意匠がまさに臺灣戦圖の凱旋圖 (第 11 圖) と

¹⁶Museum für Völkerkunde 所藏。同館には計 34 枚の得勝圖銅版が所藏されており、そのうちの 2 枚である。

¹⁷Peter Thiele, Darstellung von Kampfszenen des 18. Jahrhunderts in Chinas Randgebieten am Beispiel Taiwans, *Baessler-Archiv, Neue Folge*, Band XXVI (1978), S.281. ちなみに同館は印刷された銅版畫も所藏しており、それらの登録番號は以下の通りである。1「大剿諸賊開通諸羅並進攻斗六門」(ID 32502 / 銅版 ID 31748)、3「攻克斗六門」(ID 32501 / 銅版 ID 31749)。

¹⁸翁連溪は、乾隆の題詩の時間から、この圖の完成を乾隆 56 年から 57 年の間としている (上掲論文 44 頁)。この推定はおそらく妥当と思われるが、題詩の時期から完成時期を云うのは難しい。翁氏には恐らく檔案など別に基づく所があるのだと思われるが、いま筆者にはそれを確かめる便宜を缺く。

¹⁹北緯拍賣 2009 首屆藝術品拍賣會、宮廷藝術品專場 (2009 年 1 月 16 日)、Lot No.1003. 豫定價格 RMB4,800,000~6,000,000。落札價格は不明である。ただ調べてみると、この凱旋圖はすでに瀚

瓜二つな點である²⁰。「五福四得十全之寶」「乾隆御覽之寶」「石渠寶笈」など乾隆の印章八顆に混じって、圖の左下に一顆「皇四子和碩雍親王章」の見えるのが注目される。これは雍正がなお即位する以前の印章であるから、それを信用するかぎりでは、この圖は康熙時代の作であり、おそらく康熙末年に朱一貴の叛亂を平定した際の凱旋圖でなければならない。とすれば姚文瀚が乾隆の上覧に供したという「渡海凱旋圖」の畫稿は、この康熙圖を引き寫したものであるということになるのではないか。康熙圖は乾隆の手中にあった筈で、姚文瀚の畫稿がそれと瓜二つであるからには、乾隆が姚文瀚に康熙圖を示した上で、それを下敷きに描くことを命じたものと考えねばならないであろう。これは史料の裏付けのある話ではなく、もとより推測の域を出ないが、興味ある課題である。

最後に臺灣戰圖に關連する遺品について言及しておきたい。それは戰圖を銅版以外に雕漆²¹の技法を用いて再現したという事實である。その遺品がやはりベルリンの民族學博物館に残されている。1「大剿諸賊開通諸羅並進攻斗六門」を寫したもので、早くに Erich Hähnisch により紹介されている²²。雕漆によるこの戰圖は、第二次大戰後ソ連によって持ち去られたが、その後東ドイツに返還され、ドイツ統一後ようやく古巢に戻ったという代物である。別に3「攻克斗六門」の雕漆もかつてドイツのドレスデンにあり、また金川戰圖のものも存在したことが分かっていて、雕漆の戰圖はヨーロッパでは比較的好く知られていた²³。

海公司在 2005 年 11 月 19 日に北京で開催したオークションに出品されたようで、Lot No.198、當時の豫定價格は RMB500,000 となっている。

²⁰いまこの圖を示せないのを遺憾とするが、ネット上で検索すれば容易に見ることが出来るので、興味のある向きはそちらをご覽頂きたい。

²¹漆を厚く塗り重ねた上に彫刻を施す技法。朱色のものが多く、日本で堆朱と言われる。

²²Erich Hähnisch, Tsch'ai Ta-ki: Der Held von Tschu-lo. Geschichtliche Würdigung eines chinesischen Rotlackbildes, *Ostasiatische Zeitschrift*, 1922, S.177-184.

²³ヨーロッパにおける研究史に關しては Hartmut Walravens, Die Entsetzung von Zhule – Eine Episode aus der Taiwan-Kampagne auf einem Schnitzlackbild, *Baessler-Archiv*, Band 49 (2001), S.79-94 が詳しい。